

## 13 超過死亡にみる戦前期日本（旧植民地を含む）における “スペインかぜ”世界流行の影響

逢見 憲一<sup>1,2)</sup>, 丸井 英二<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>国立保健医療科学院公衆衛生政策部, <sup>2)</sup>順天堂大学医学部公衆衛生学教室

**【目的】** わが国における“スペインかぜ”による健康被害と，“スペインかぜ”世界流行の後世へ与えた影響を，日本本土と旧植民地および米国における超過死亡の比較を通じて定量的に把握する。

**【方法と資料】** 対象期間は1899年10月から1938年9月とした。日本本土，樺太，朝鮮，台湾および米国について，人口動態統計を用いて月別季節指数を算出し，インフルエンザによる超過死亡数・率を推計した。

資料は，日本本土については「日本帝国人口動態統計」（1899-），樺太「樺太庁治一班」（1916-1927）「樺太庁統計書」（1928-），朝鮮「朝鮮総督府統計年報」（1906-），台湾「台湾人口動態統計」（1906-），米国「Mortality Statistics」（1900-）を用いた。

なお，樺太，朝鮮，台湾の超過死亡数・率については総会にて発表する。

### 【結果】

1. 超過死亡月数 “スペインかぜ”流行開始前の1899年10月～1918年9月の19年間に，インフルエンザによる超過死亡がみられた月数は，日本本土が4（年平均0.21），米国は6（同0.32）であった。“スペインかぜ”流行期である1918年10月～1920年9月の2年間の超過死亡月数は，日本が11（年平均5.50），米国が10（同5.00）であり，“スペインかぜ”流行の終息以降の1920年10月～1938年9月の18年間では，日本が29（年平均1.61），米国が26（同1.44）と日本が米国を上回っていた。

2. “スペインかぜ”流行期の超過死亡数 1918年10月～1920年9月の“スペインかぜ”流行期の超過死亡数の合計は，日本本土が462,083人，米国が555,901人であった。“スペインかぜ”流行期を1919年春までの前流行と1919年冬からの後流行に分けた場合，前流行にあたる1918年10月～1919年9月の超過死亡数は，日本が283,571人，米国が435,965人，後流行にあたる1919年10月～1920年9月の超過死亡数は，日本が178,512人，米国は119,936人であった。

3. 超過死亡率 対象期間である1899年10月～1938年9月を通じての，人口千人あたりの年平均超過死亡率は，日本本土が0.42，米国が0.31と，日本が米国の1.36倍であった。これを時期別にみると，“スペインかぜ”流行開始までの1899年10月～1918年9月の年平均超過死亡率は，日本・米国とも0.05で日本が米国を約2%上回る程度であった。1918年10月～1920年9月の“スペインかぜ”流行期の年平均超過死亡率は，日本本土が4.16，米国が3.32と，日本が米国の1.25倍であった。これをさらに前流行と後流行に分けた場合，1918年10月～1919年9月の前流行期の超過死亡率は日本が5.13，米国が5.24と，日本が米国をわずかに下回っていたが，1919年10月～1920年9月の後流行期の超過死亡率は，日本が3.20，米国が1.39と，日本の死亡率が米国の約2.30倍となっていた。1920年10月以降の“スペインかぜ”流行後の時期には，超過死亡率は日本が0.40，米国は0.25と，日本が米国の1.59倍であった。

**【考察】** (1) “スペインかぜ”による超過死亡率は，全体では日本が米国の1.25倍であった。前流行の死亡率は日米同程度であったが，後流行では日本が米国の2倍以上であった。(2) “スペインかぜ”以前は，インフルエンザによる超過死亡率は日米とも同程度であったが，“スペインかぜ”流行（特に後流行）中および後の時期になると米国に比べ日本の方がインフルエンザによる超過死亡率は高く，“スペインかぜ”世界流行の日本への影響はより大きかったと考えられた。